

ルーム・サルタナトとホラズムシャー

井 谷 鋼 造

はじめに

一 ホラズムシャー、ジャラールッディーンに關する五つの史料

二 アフラートをめぐるアイユーブ朝とホラズムシャーの對立

三 ルーム・サルタナトとホラズムシャー及びアイユーブ朝の交渉經過

四 ヤッス・チメンの戰

おわりに

はじめに

ヒジラ曆六一八年シャッワール月八日(西曆一二二二年十一月二五日)ホラズムシャー、ムハンマド Khwārazmshah Muhammad b. Tekish の長子ジャラールッディーン Jalāl al-Dīn MINKBRNY⁽¹⁾ はスィンド河畔でチンギス・ハン自身の率いるモンゴル軍に敗北した。ジャラールッディーンは馬を河に乗り入れ、對岸へ渡り切つて追撃を免れたが、彼の部下の多くはモンゴル軍の攻撃に斃れ、或いは逃亡中に溺死して彼の勢力は一時潰滅したかに見えた。ジャラールッディーンはインドで敗殘の身分にもかかわらず、生來の勇猛果敢、豪膽ぶりを發揮して土地の有力者に挑戦し、配下の軍勢力の再結集、再編に努めた。六二一年(一二三四/五年)ジャラールッディーンはインド脱出を決意し、キルマーンに姿を現わした。この時以降ホラズムシャー、ジャラールッディーンは西はルーム、北はアブハーズ、東はキルマーン、南はフーヰ

スターンに廣がる領域の内で活動し、チヨルマグン・ノヤン麾下のモンゴル軍の追討を受けた末六二八年シャッワール月十五日（一二三二・八・十六）ディヤール・バクル地方で殺害されるまで西アジアの一大勢力を率いていた。

西アジアにおける動向も含めてジャラールッディーンの生涯全般については古く、C・M・ドーソンが『モンゴル帝國史』の中で詳しく述べており、史料批判についての問題はあるものの、今尚價值を認めうる内容をもっている。ところが、ドーソンは本稿で取り上げようとするルーム・サルタナト *Salṭanat-i Rūm* とホラズムシャーの關わりについては僅かに觸れるだけで、特にホラズムシャー勢力衰亡の直接的な原因となったヤッス・チメン *Yasi Chaman* の戰については殆んど述べる所がない。⁽³⁾ ドーソン以降の研究についてもルーム・サルタナトとホラズムシャー勢力の關わりを同時代史料の記述に即して明らかにしたものはない。

本稿はルーム・サルタナト史研究の立場からルーム・サルタナトとホラズムシャーの關わりについて記した同時代史料を讀解、検討することにより、ルーム・サルタナトとホラズムシャーの關係が如何なる歴史的狀況を背景に推移し、如何なる結果をもたらしたかという點を明らかにすることを目的とする。ジャラールッディーンの滅亡が最終的にモンゴル軍の追討によるものであったことから考えれば、モンゴル軍の到來以前のルーム・サルタナトとホラズムシャーの關わりを考察することはモンゴル軍侵攻直前の西アジアとその一端としてのルームが置かれていた歴史的狀況を把握する一助ともなる。

一 ホラズムシャー、ジャラールッディーンに關する五つの史料

ドーソンの『モンゴル帝國史』のジャラールッディーンに關する記事は主に次の三つの史料に據ったものである。その三つは、イブヌルアスミール *Izz al-Din Abū al-Ḥasan 'Alī b. Abī al-Karam Muḥammad* …… *Ibn al-Athīr al-Shaybānī* ナサウアー *Shihāb al-Din Muḥammad b. Aḥmad (Khurandizī Zaydarī) al-Nasawī* 及びシヤヴァイニー

‘Alā’ al-Dīn ‘Alā Malik b. Bahā’ al-Dīn Muḥammad b. Muḥammad al-Juwaynī がそれぞれ著わした作品であり、この三つの史料についてはドーソン自身が解題を行なっている。⁽⁴⁾ ドーソンの『モンゴル帝國史』執筆時（一八三四—五年の出版時以前）にはこれらの史料の校訂テキストはいずれも未だ出版されておらず、ドーソンは手寫本の原テキストのままこれらの史料を利用したのである。その後、イブヌルアスィールの *al-Kāmil fī al-Tārīkh* (以下 K. T. と略) は一八五一—七六年 C. J. Tornberg により校訂、出版され⁽⁵⁾、ナサウィーの *Sira al-Sulṭān Jalāl al-Dīn Mankubirī* (以下 *Sira* と略) は一八九一年 O. Houdas により校訂テキストが、一八九五年にはフランス語譯が出版され⁽⁶⁾、更にジュヴァイニーの *Tārīkh-i Jahāngushāy* (以下 T. J. と略) は一九二—三七年 Muḥammad Qazwīnī によって校訂テキストが刊行されて現在利用の便宜に供されている。⁽⁷⁾

まずはこれら三つの史料の記述内容に沿ってこれら三つの史料とホラズムシャーとの関わりについて考えてみよう。最初にイブヌルアスィールの『完史』であるが、この史料の著者イブヌルアスィールとジャラルッディーンとの間には直接に何の關係もない。にもかかわらず、この大編年史のヒジラ暦六二二年以降末尾に至る記事中にはジャラルッディーンの活動の事蹟がまことに詳しく記述されている。この時期のジャラルッディーンの活動について正確な日附が分るのはその殆んどがイブヌルアスィールのお蔭である。以下にその日附を舉げてみよう。

六二二年ラジャブ月十七日（一二二五・七・二五）アゼルバイジャンのタブリーズ Tabriz 入城（K. T. p. 433）

六二三年ラビーウー月八日（一二二六・三・九）グルジアのティフリース Tiflis 攻略（p. 450）

同年ズルカアダ月十五日（一一・七）アフラート Akhlāt 着陣⁽⁸⁾（p. 461）

同年ズルヒッジャ月二二日（一二・十四）アフラートを撤退（ibid.）

六二七年ジュマードー月二八日（一二三〇・四・十四）アフラート征服（p. 488）

同年ラマダーン月二八日（八・一〇）ヤッス・チメンの戦に敗北（p. 489—490）

イブヌルアスィールの『完史』は六二八年の記事を以て終るが、その末尾に近い部分で彼は「六二八年の末までジャラルッディーン(9)の消息は不明であった。六二九年のサファル月末日（一二三一・一二六）までも同様で我々は彼がどうなったのかを知らなかった」(p. 506)と記し、大編年史欄筆の直前までジャラルッディーン(9)の消息に關心を寄せていた様子が窺われる。ジャラルッディーンとは直接の關係を持たなかったイブヌルアスィールが彼の活動を自らの作品の中で詳述した理由はイブヌルアスィールがジャラルッディーン(9)の西方における活動範圍に極めて近いマウスィル al-Mawṣil に居住していたことに求められよう。しかもイブヌルアスィールはジャラルッディーン(9)の没後二年を経ないうちに死去している。つまりイブヌルアスィールはジャラルッディーン(9)と同時代の大歴史家として彼の活動に強い關心を寄せ、かつ彼の活動について正確な情報入手しうる立場にあったのである。それ故一イスラーム教徒として客觀的な記述内容を持つ史料を遺した。

第二にナサウイーの『スルターン、ジャラルッディーン傳』であるが、この史料の著者ナサウイーとジャラルッディーン(9)の關係は極めて親密な主従のそれであった。ナサウイーは六二二年マラーガ Marāgha に到着したジャラルッディーン(9)の許へ伺候して、

文書作成書記官職 (Kitāba al-insā) が私に託された。私はそれを信託ゆえに不承不承引き受けたが、經驗の少なさと知見の缺如のために自らを頼りなく思い、その職に附随する不斷の所得 (ḥaṣṣad)、所得と切り離せない利益、損得も苦樂も共にある立場に困惑した。ある日私は文書作成の收入として一千ディーナール以上を得た。スルターンはホラーサーンとマーザンダーンの人々の件を片附けるためのナヒチュヴァン Nakhjavān に居た。別の日にはこれより少いこともあったが、所得は途切れたことがない。私はその職に關して私と競争しようとする者と戦おうとするまでになった。(Stra, pp. 194—195)

と書いている。つまり當初自信のなかったジャラルッディーン(9)の許での文書作成書記官職に後にはその實入りの良さゆ

えに習熟したことを告白しているのである。このように自身の経験をも織り込みながら、側近としてジャラールッディーンの活動を記録したナサウィーの著作は史料として無比の価値を有するものである。しかもナサウィーがこの傳記を執筆した動機が彼自身がイブヌルアスィールの *al-Kāmil* を讀んだことにあったことは傳記の冒頭に記されている。⁽¹⁰⁾ すなわちなサウィーがジャラールッディーンの傳記を執筆した時期には既にイブヌルアスィールの『完史』が讀まれており、ナサウィーは餘人の到底知りえない自身の體驗を基礎に獨立した傳記を完成させたのである。この二人の史家の史料上のつながりはナサウィー（六四七年没）とイブヌルアスィール（六三〇年没）が共にその晩年シリアのハラブ *Ḥalab* に滞在したことに求められる。そしてナサウィーは恐らくハラブで『完史』を見たのであり、『完史』の最初の寫本（或いは原本）はハラブに存在したのである。

第三にジュヴァイニーの『世界征服者史』であるが、この有名なベルシア語史料の著者とジャラールッディーンの因縁も浅からぬものがある。彼自身にジャラールッディーンとの主従關係はなかったが、彼の祖父 *Shams al-Dīn Muḥammad* は *shāhib al-dīvar* としてホラズムシャーに仕え、その死についてはナサウィーが記録している。⁽¹¹⁾ それによればジャラールッディーンの第二次アフラート攻圍時（一二二九—三〇）に死去したジュヴァイニーの祖父は、

私に遺言し、遺児の取り計らいについて私を後見人とした。また私に遺體が彼の出身地であるホラーサーンのジュヴァインに運ばれることを遺言し、私はその通りにした。スルターンは彼が遺した物に全く手をつけなかった。*(Sifrā, p. 315)*

という。この記述よりジュヴァイニーの祖父はナサウィーと親しく、共にジャラールッディーンに仕えていたことが明らかとなる。シャムスッディーン・ムハンマドの孫である歴史家アラウッディーン・アターマリクはモンゴル人のイルハン國に仕えていたため、自らの史書中で祖父が徹頭徹尾モンゴル人と敵對したホラズムシャーに仕えていたことを記していない。にもかかわらず、ジュヴァイニーとジャラールッディーンの關係は前述のナサウィーの記述からも明らかなよう

に、祖父を通じて密接なものであったといえる。

イブヌルアスィール、ナサウィー、ジュヴァイニーという三人の史料作者とジャラールッディーンとの個人的な、或いは史料上でのつながりは以上の説明で確認されたが、筆者は次にこれら三つの史料に加えて、⁽¹²⁾ドーソンが殆んど利用しえなかった、しかもジャラールッディーンの活動と深いつながりを持つ二つの史料を紹介しようと思う。それはルーム・サルタナトで書かれたイブン・ビービー al-Husayn b. Muḥammad b. 'Alī al-Jaḥfari al-Rughadi (Ibn Bibi al-Munajjima) 及びシリアのアイユーブ朝に仕えたハマウィー Muḥammad b. 'Alī... ibn Naḥf al-Kaṭib al-Hamawī の著作である。この二つの史料のうちイブン・ビービーの *Kitāb al-Aẓwar al-'Alā'iya fī al-Umur al-'Alā'iya* (以下 A. A. と略) ⁽¹³⁾ には著者イブン・ビービーの両親とジャラールッディーンの関わりを明示した *dhikr* があるので、以下にその一部を譯出する。

私の母 Bibi Munajjima—アッラーが彼女に慈悲を垂れるように—は偉大なる「マーム」シャーフイー Shafī'—アッラーが彼を嘉するように—派のニーシャープール Nishapur にあける長 Kamal al-Dīn Simnānī の娘であり、母方では Muḥammad Yāyā—⁽¹⁴⁾アッラーが彼を嘉するように—の孫であった。彼女は占星學に熟達し、天運に恵まれて彼女の占いはよく當たり、信頼を受けた。カームヤール Kamāl al-Dīn Kamyār が使節としてアフラートのスルターン、ジャラールッディーン—アッラーが彼に慈悲を垂れるように—の許へ到った時、私の母がスルターンの側近くにいるのを見、占星術において彼女が第一人者であることを知った。女性のうちでこの學問を行なう者は珍しかったのでその事情に驚き、(ルームへ) 歸還した時スルターンの前でその話を珍しいこととして語り聞かせた。スルターン、ジャラールッディーンがアーシド Amid の門前でモンゴル Mughul 軍に惨敗したので私の両親はディマシク Dimashq へ落ちのびた。(ルームの) スルターン、アラウッディーン 'Alā' al-Dīn Kayqubādī は両親のことを探索させ、ディマシクにすることが分かったのでマリク・アシラフ Malik Ashraf の許へ両親を呼びに使者を送り、使者は丁寧に両親をルーム地方へ連れて來た。(中略) (私の母は) スルターンの御前での文書作成官職 (*insha*) を私

の父 Majid al-Din Muḥammad Tarjūmān—アッラーが彼に慈悲を垂れるように—のために求めた。私の父は Gūrī Surkh⁽¹⁶⁾ のサイドであり、グルガン Jurjān の有力者であったが、その時には王室の farāsh-khāna の監督職にあった。父は直ちに文書作成官職に上げられ、常時側近くに仕え、殊遇に浴した。父のこの國運 (dawlat) における立場は重要なもので、重要な使者の要件、例えばバグダード Baghdad やシリア Shām、ホラズム人たち、'Alā' al-Dīn Naw-Musalman⁽¹⁷⁾、そしてモンゴルの強大な軍隊がこの地方を征服して後は諸 urda への nichi として彼より適任者を見い出せなかった程である。父は辯舌流暢で、韻文散文を共に良くし、ホラーサーンの人々の流儀の書體は人々に愛好された。(A. A. pp. 442—443)

ここに譯出、引用した部分から、イブン・ビービーの兩親が共にイラン東北部の出身で、特に母親は占星家としてジャラールディーンの側近くに仕え、アフラート攻圍時にルームからの使者が彼女に會っていること、ジャラールディーンの滅亡後兩親がディマシクに落ちのび、そこからルームのスルターン、アラウッディーン・カイクバードの許へ招かれて優遇されたことは明らかである。イブン・ビービーの著作の冒頭に彼の父がジャラールディーンの時代に前述のジュヴァイニーの祖父シャムスディーンの薰陶を受けたことを記していること、更に作品中の隨所に史家アターマリクとその兄弟ムハンマドの名が讃辭と共に現れること、そして作品自體が他ならぬジュヴァイニーに獻呈されたことの三點を考へ合わせるとイブン・ビービーとジュヴァイニーの間に強い結びつきがあったことは疑いえない。そしてジュヴァイニー家との關係は前述のナサウィーとジュヴァイニーの祖父の關係を通して、ナサウィーとイブン・ビービーをも結びつける。つまりジュヴァイニーの祖父、イブン・ビービーの兩親、そしてナサウィー本人はジャラールディーンの臣下としてホラズムシャーの宮廷において互いに相知る閑柄で同時代を生きていたのである。事實イブン・ビービーの著作中にはナサウィーの名が Shihāb al-Dīn Zaydārī として三箇所現われている。⁽²¹⁾ この記録はナサウィー自身の生涯を跡附ける上で價值の高いものであるが、記事の現れる経緯については後述する。

最後にアイユーブ朝側の史料としてのハマウイーであるが、その著作 *al-Tarīkh al-Mansūrī Talhīs al-Kashf wa al-Bayān fi Hawādhir al-Zamān* (以下 T. M. と略) の現存する唯一の寫本はレニングラードにあり、一九六〇年ソ連でそのファクシミリ版テキストが刊行された。⁽²²⁾ 近年幸いにこの讀みづらい寫本と對校しうる部分校訂テキストが Abu al-'Id Dawlaw によつて出版されたことと史料としての利用が可能となった。⁽²³⁾ ハマウイーはそのニスバのとおりシリアのハマート Hamat の出身者であらうが、アイユーブ朝のアシラフの兄弟マリク・ハーフィズ al-Malik al-Hafiz に書記兼宰相として仕えた。著者ハマウイー自身によればヤッス・チメンの戦後、

六二七年ズルヒッジャ月二〇日 (一二三〇・十・三〇) エルジシ Arjish でマリク・ハーフィズは彼の書記 (katib) ハマウイーを捕え、彼が所有していた奴隸、馬、金、衣服その他の家財を奪ひ、夜中彼を Jabbar 要塞へ送った。これはマリクの泥酔が原因である。(T. M. p. 223/202b)⁽²⁴⁾

という事件が発生し、翌年マリク・アシラフの執り成して解放され、以後ハマウイーはハーフィズの許を離れてヒムス Hims の領主 al-Malik al-Mujāhid⁽²⁵⁾ の子マリク・マンスール al-Malik al-Mansūr に仕えるようになった。ハマウイー著作のアラブ語編年史の書名『マンスール史』はこの君主の名に因んだものである。ハマウイーは舊主ハーフィズの書記として當時のシリアやジャズィーラ地方の状況を詳しく知りうる立場にあった。ヤッス・チメンの戦に出陣したハーフィズその他のアイユーブ朝諸王の戦いぶりについても彼自身の従軍経験をもとに詳しく、臨場感に富む描寫を遺している。

更に興味深いのはハマウイーが後に仕えたヒムスのマンスールを通じて前述のナサウイーと知り合う可能性があったことである。イブン・ビービーによれば一二四一年春ホラズム人たちが、ルームとヒムスの連合軍に打破された際、ホラズム人の本據ハッラーン Harrān にいたジャラルッディーン⁽²⁶⁾の書記 (muṣṣhī) シハーブッディーン・ザイダリーことナサウイーはマンスールと密かに取り引きして、ハッラーンをルーム側に渡さず、却つてアイユーブ朝のハラブ領主 Malik Nasir に渡したのである。⁽²⁶⁾ この事件に現われるナサウイーとマンスールの交渉から考えると、マンスールに仕えたハマウ

イーとマンスールと交渉したナサウィーは二人とも書記であつたという關係上互いに知り合う可能性があつたと考えられるのである。但しこの可能性を裏附ける文獻的な確證を見出すことは出来なかつた。それ故、『マンスール史』の作者ハマウィーとジャラルルッディーンの間に何らかの直接的な關連を求めることは今のところ不可能である。にもかかわらず、ジャラルルッディーンの交渉相手となり、アフラートの攻防をめぐつて彼と決定的な對立關係に入つたアイユーブ朝側の史料としてハマウィーの遺した記録の價值は極めて高い。

以上、ジャラルルッディーンの活動に關する五つの史料の記述から、各史料作者とジャラルルッディーンの關係、並びに史料作者間相互の關係について考察してみた。その結果彼自身の書記ナサウィーとモンゴル側の記録者ジュヴァイニー（祖父を通して）、ルーム側のイブン・ビービー（兩親を通して）、この三者間にはホラズムシャー臣下としての共通性があることが明らかになつた。但し、筆者がこの三人の史料作者間に密接なつながりがあることを指摘したのは決して三篇の史料が單一の地平上に成立したことを述べるためではない。否、むしろ史料の内容から見限り、三篇の史料は各々史料作者自身の立場を最もよく反映した、特色ある獨立の作品である。ナサウィーの『ジャラルルッディーン傳』が全く他に類を見ない史料であることは改めて述べる必要もないであらう。ジュヴァイニーの『世界征服者史』がイランの史學史上高く評價されるのと同様に、イブン・ビービー著作のルーム・サルタナト史『アラウの諸事に關するアラウの諸命令』もまた、その高い文學性に加えて獨自の正確な情報提供性ゆゑにルームの史學史上高い評價を與えられねばならない。

これら三者の史料に對して、アラブの史料作者であるイブヌルアスィールとハマウィーの作品はジャラルルッディーンに關心を寄せながら本來無關係な立場の史家と彼に敵對する勢力に屬する書記が遺した記録なるが故にジャラルルッディーンの活動に關する前記三者とは別角度からの一層重要な證言となつてゐるのである。

筆者は以下これら五つの同時代史料をもとに、西アジアにおけるホラズムシャー、ジャラルルッディーンの活動及びルーム・サルタナトとホラズムシャーの關係を當時の歴史狀況の中で考察してみたいと思う。

二 アフラートをめぐるアイユーブ朝とホラズムシャーの對立

ホラズムシャー、ジャラールッディーンが六二二年初頭にフーズィスターンに現れてから何處でどのような活動を行なったかについては既にドーソンの『モンゴル帝國史』に詳しく述べられているので、ここでは繰り返さない。當時の西アジアの主要な政治勢力としては、エジプト・シリア各地にアイユーブ朝の諸王、バグダードを中心としたイラクにアッバース朝ハリーファ、ルームにセルジューク朝のスルターンがあり、アゼルバイジャン、ファールス、マウスイルにはそれらのアタベグ政權、アーミド、マルディン Mardin、ハルプト Khartabirt などのティグリス、ユーフラテス上流域の諸都市にはアルトゥク Artuq 朝諸王が割據していた。更に地中海沿岸部シリアには十字軍のフランク人、キリキアにアルメニア王國、カフカースにグルジア王國があつてそれぞれに勢力を扶植していた。イラン、シリアにはその上にイスマーイール派が確固たる政治勢力を築いていた。これらのうちで十字軍に對抗した「英雄」サラーフッディーンとその兄弟アーディル al-Malik al-Adil の子孫が領域内の各地に分立したため内紛が絶えなかつた。イブヌルアスィールやハマウィーの記述によると、アイユーブ朝内部の各都市の支配權をめぐる抗争は外部のルーム・サルタナトやハリーファ、アルトゥク朝、十字軍などの諸勢力の動向と複雑に絡み合い、目まぐるしいばかりである。

モンゴル軍の追撃を逃れ、西アジアに現れたホラズムシャーがフーズィスターンのトゥスタル Tustar、バグダード近郊のバアクーバー Ba'qubā、イラク北部のダクーカー Daquqa の諸市へ當初進軍した理由はイブヌルアスィールによれば馬の補給とアッバース朝ハリーファへの怨恨のためであつた。⁽²⁷⁾その後ジャラールッディーン率いるホラズム軍はナサウィーがグルジア人の「獵場 (maayada)」と化していたと表現するアゼルバイジャンのアタベグ領へ入り、支配者ウズベグ Uzbak の無能と弱體に乗じて六二二年ラジャブ月十七日タブリーズに入城した。續いてジャラールッディーンは全精

力をキリスト教徒グルジア王國との戦いに傾注し、六二三年ラビーウー月八日には國都ティフリスを攻略した。ジャラールッディーンのアゼルバイジャン進撃は當時の西アジアで最も脆弱な政治勢力に向けられたものであり、グルジアへの遠征は當時のイスラーム世界に北方から脅威を与えつつあったキリスト教徒勢力に對する反撃であったという點で彼の行動には一定の是認と稱賛が與えられた。例えばイブヌルアスィールはジャラールッディーン⁽²⁹⁾のティフリス攻略を「大手柄 (al-afā'il)」と表現して絶賛し、この都市が五一五年 (一二二〇) にグルジア人の支配に入って以來セルジューク朝のマムード Mahmud b. Mahmud b. Malikshah とアタベグ、ウズベグの祖父イルディギズ Ildigiz がそれぞれ奪回を企てたが、失敗に終わったことを記している。

ジャラールッディーンが後にアイユーブ朝との對立の焦點となるヴァン湖畔の都市アフラートへ向かったのはティフリス攻略の直後 (ジュマードⅡ月) であり、この行動が以後四年に亙る彼とアイユーブ朝のアフラートをめぐる對立の發端となった。以下アフラートの問題を中心にジャラールッディーンとアイユーブ朝の對立の様相を考察するが、まず諸史料より明らかなアフラートをめぐる諸事件を年代順に列挙しておく。

六二三年ジュマードⅡ月 (一二二六・五・三〇—六・二七) ジャラールッディーンの進軍

同年ズルカアダ月十五日 ジャラールッディーン着陣 (第一次攻圍)

同年ズルヒッジャ月二三日 ジャラールッディーン軍の撤退

六二四年シャアバーン月 (一二二七・七・十七—八・十四) アフラートのハージブ・フリー Husam al-Dīn 'Alī b. Ham-mād の軍ジャラールッディーン領のアゼルバイジャンへ進撃

六二六年シャッワール月上旬 (一二二九・八・三—九・一) ジャラールッディーンの包圍開始 (第二次攻圍)

六二七年ジュマードー月二八日 ジャラールッディーンによる征服

さて、ジャラールッディーンがティフリスの攻略後アフラートへ最初の進軍を行なった理由はイブヌルアスィールの

記事に見えるアイユーブ朝内部の對立に求められる。⁽³⁰⁾當時アイユーブ朝内部ではディマシクに據るマリク・ムアッザム al-Malik al-Mu'azzam が兄弟でジャズィーラ、アフラートを支配するマリク・アシラフと對立しており、イルビル Irbil、アーミド、マルディンの各領主とジャラールッディーンに呼びかけて對アシラフ共同戦線を形成した。一方、アシラフはエジプトの兄弟マリク・カーミル al-Malik al-Kamil と結び、マウシルのアタベグ、ルームのスルターンと同盟してムアッザムに對抗した。ハマウイーによれば六二三年にムアッザムの許へ來たジャラールッディーンの使者は彼に *khil'a*、軍旗 (*sanaq*)、二本の槍、一振の劍を獻じ、彼から三千張のディマシク製の弓を贈られて歸還した。⁽³¹⁾同時期に着したルームの使者は多數の馬と贈物を攜えて行ったが、ムアッザムに一顧だにされなかったという。この記述からアイユーブ朝内部の對立がルームやホラズムシャーとの關係に反映していたことは明らかで、ジャラールッディーンはムアッザムの同盟者としてアシラフの領土であるアフラートへ進軍したのである。⁽³²⁾アフラートへの進軍直後ジャラールッディーンの許へキルマーンのバラク・ハージブ Barāq Ḥājib 反亂の報が届き、ホラズムシャーはワズィールのシャラフルムルク Sharaf al-Mulk Fakhr al-Din 'Alī al-Jandī をティフリスへ殘してキルマーンへ急行した。イブヌルアスィールによれば、ジャラールッディーン不在の間糧食に窮したシャラフルムルクはエルズルム Arzan al-Rūm 方面へ掠奪部隊を送ったが、歸途アフラート通過の際マリク・アシラフの मामूलूक出身のハージブ・アリー率いるアイユーブ朝軍に襲撃され、掠奪品を取り返されるといふ事件が起った。⁽³³⁾冬の訪れと共に退陣を餘儀なくされたジャラールッディーンの第一次アフラート攻圍はこの事件が直接の原因である。⁽³⁴⁾

一方アイユーブ朝内部の状況はハマウイーによれば六二三年ラマダーン月十二日(一二二六・九・六)アシラフ、ムアッザム兄弟がディマシクにおいて和解の交渉を開始したことにより對立關係が緩和の方向へ向かっていた。ムアッザムとアシラフが和解の交渉を終えたのは翌年のジュマダーⅡ月(一二二七・五・一九一六・一六)であり、この間のジャラールッディーンによるアフラート攻圍は二人の交渉の経過にも影響を及ぼしたに相違ない。イブヌルアスィールは和解後の兄弟が

エジプトのカーミルにジャラルッディーンのアフラート攻圍を知らせ、「この状況はアーディル家 (al-bayt al-'Ādil) 再建のための一致團結を必要とする」と訴えていたことを記している。⁽³⁶⁾ この記事からジャラルッディーンをアフラート進軍へと向かわせたアシラフとムアッザムの対立は少くとも表面上解消されたことが明らかになり、以後アフラートに對する軍事行動はアイユーブ朝全體に對する挑戦と受け取られることとなった。

こうした状況下、アフラートのハージブ・アリーはアラムート Alamut のイスマール派及び侵入したモンゴル軍の一隊と戦うためジャラルッディーンが東方に出征して不在の間にアゼルバイジャンへ進軍した。シャラフルムルク率いるホラズム軍は敗北し、ハージブ・アリーのアイユーブ朝軍はホーイ Khuy' マランド Marand' ウルミーヤ Urmīya' ナヒチェヴァンの各都市を占領した。⁽³⁷⁾ しかもハージブ・アリーはアフラート歸還に當たつてジャラルッディーンの妻でイラクのセルジュク朝最後のスルターン、トグルイル Tughril b. Arslan b. Tughril b. Muḥammad b. Malikshah の娘であつた女性を伴なつた。ジュヴァイニーによればアフラートを二度目に攻圍したジャラルッディーンはこの女性が自らの意志で去つたことをハージブ・アリーによる拉致であると假定してこの事件を軍事行動への口實の一つとした⁽³⁸⁾が、これは單なる口實にすぎない。むしろハージブ・アリーのアゼルバイジャン進撃がイランにおけるモンゴル軍との戦を控えていたジャラルッディーンにとって背後の大きな脅威となつていたことが強調されねばならない。イブヌルアスィールによればディマシクのムアッザムは六二四年ズルカアダ月末日 (一二二七・十一・十二) に病死し、⁽³⁹⁾彼の死が契機となつてシリアのアイユーブ朝内部にもエジプトのカーミルとジャズィーラのアシラフを中心とした支配體制の再編が行なわれようとしていた。六二六年シャアバーン月二日 (一二二九・六・二六) アシラフがムアッザム遺領のディマシクに權力を確立し、アシラフに代わつてエジプトの實力者カーミルがジャズィーラに進出することを以てこの再編は完了した。⁽⁴⁰⁾ アシラフ、カーミルはこの時点まで一貫してアフラートのハージブ・アリーを通じてホラズムシャー勢力と對立しており、アシラフを後援していたカーミルが自らアフラートへの補給基地であつたジャズィーラに現れたことはアフラートをめぐ

る對立に一層拍車をかけた。

但し六二四—六六年にホラズムシャーとアイユーブ朝の間で大規模な衝突は發生しなかつた。その理由は兩者共に當時の複雑な政治狀況の中で當面する別々の對外勢力に對處せねばならなかつたからである。ナサウィーによればジャラールッディーンは六二五年ラマダーン月二三日（一二二八・八・二六）イランに侵攻したモンゴル軍とイスファハーン⁽⁴¹⁾ Istahān 郊外に戦い、敗北を喫したが、窮地を脱してラマダーン明けの祝日にイスファハーンへ戻つたという。一方アイユーブ朝側では前述のムアッザム没後の體制再編と共に六二四年に神聖ローマ皇帝フリードリヒⅡ世率いる新たな十字軍部隊がシリヤ島を経てシリヤに到着したことへの對處が當面の懸案となつていた。すなわち六二五年の時點でアイユーブ朝とホラズムシャーの兩者とも雙方の直接對立の焦點であつたアフラート問題に當面のモンゴル軍、十字軍への對策を優先させたのである。ジュヴァイニーによればジャラールッディーンはイスファハーンから歸還後再びグルジアに遠征した。⁽⁴³⁾ アイユーブ朝のカーミルはフリードリヒⅡ世との交渉の末六二六年ラビーウⅡ月朔日（一二二九・二・二七）聖家イエルサレムを無血で十字軍に引渡⁽⁴⁴⁾し、前述のように同年シャアバーン月二日には體制の再編を完了した。そしてこの前後にアフラートの町の内部でも大きな變化が起つた。イブヌルアスィール及びハマウイーによればアシラフが自らのマムルーク、アイベグ 'Izz al-Dīn Aybak を送つてアフラートのハージブ・アリーを逮捕させたのである。イブヌルアスィールは、

我々は彼の逮捕を必要とするような如何なる事態も承知してゐない。彼はアシラフを氣遣ひ、忠告し、その領土を守り、民衆に對して行ない正しく（hasan al-sira）⁽⁴⁵⁾ 長期間ホラズムシャー、ジャラールッディーンの面前に立ちほだかつて抵抗し、アフラートを彼以外には誰も出来ないようなやり方で守つて來たのだ。（K. T. p. 485）

と記してハージブ・アリーの逮捕が當時の狀況から見て不可解な出來事であつたことを示している。ハマウイーによればハージブ・アリーは六二四年のアゼルバイジャン領攻撃後六二五年には自らナスィビーーン Nasibin へ赴いてアシラフにアジヤムへの出馬を要請し、タブリーズその他の都市の人々が「マリク・アシラフが來れば我々は彼に領土を渡そう」

と言ったことを傳えた。アシラフは當時のアイユーブ朝内外の事情を慮って、ハージブの要請を拒んだが、六二六年には更に強い調子で「もしアシラフが當地へ着かなければ、當地の存続は覺束ない」ことを訴えるハージブ・アリーの書信が届いたとい⁽⁴⁵⁾う。兩者の記述を併せ考えれば、ハージブ・アリーがアフラートの *mutawalli hakim* としてアイユーブ朝領土の保全と擴大に多大な寄與をしたことは明らかである。にもかかわらず、アシラフがジャラルッディーンの第二次アフラト攻圍以前に町の防衛の殊勲者であるハージブ・アリーの逮捕を命じたことはアシラフがハージブを除くことによりジャラルッディーンと何らかの妥協を謀⁽⁴⁶⁾ったことを意味する。そしてハージブを犠牲者としたこの妥協は效を奏さず、六二六年シャッワール月上旬にジャラルッディーンはアフラートの攻圍を開始した。この度の包圍戦は嚴冬期にも停止されることなく翌春まで八箇月に亘⁽⁴⁷⁾って續き、最後は糧食盡き果てた籠城軍の一部による裏切りでアフラトはホラズムシャーに引渡された。この第二次攻圍の間に、ディマシクのアシラフやジャズィーラのカーミルからアフラトへの援助が行なわれたという記録はない。もし、アイユーブ朝からアフラトへ全く軍事的な援助が行なわれなかったとすれば、アイユーブ朝はジャラルッディーンの第二次アフラト攻圍の時期にホラズムシャーとの軍事的對決を諦め、領土の喪失を甘受するような状況にあったと解釋せざるを得ない。しかし、實際にはジャラルッディーンのアフラト征服から四箇月後アイユーブ朝とルーム・サルタナトの連合軍はホラズムシャー勢力と衝突した。この軍事的對決の背後にはルームからアイユーブ朝への協同作戰に對する熱心で眞摯な働きかけがあったのである。ジュヴァイニーの收録するアフラト征服の *fath-nāma* 中に表明された「聞もなくシリア、ルームの諸地方は國運の僕たち―アッラーがそれを永遠にし、彼らを助けるように―に占領されるであらう」という文言は⁽⁴⁸⁾ルームやシリアへ向けたホラズムシャーからの宣戰布告の性格をもっていた。軍事的對決が不可避となった状況でルーム・サルタナトとアイユーブ朝はジャラルッディーンを共同の敵とする連合の道へ歩み入ったのである。ではこの状況に至る以前のルームとアイユーブ朝、及びホラズムシャーの關係はどうであったのか。次にこの關係を考察せねばならない。

三 ルーム・サルタナトとホラズムシャー及びアイユーブ朝の交渉経過

ルーム・サルタナトとホラズムシャーの交渉は六二二年ジヌマダⅡ月下旬（二二五・六・三〇—七・八）アゼルバイジャンに入ったジャラルッディーンがマラーガの町からルームへ使者を派遣したことに始まる。使者がカーディーでラカブが Mujir al-Din であったことはイブン・ビービーとナサウィーが一致して伝えるところである。イブン・ビービーはジャラルッディーンがルームのスルターン、アラウッディーン・カイクバードへ送った手紙の全文をその作品中に載せている。⁽⁵⁰⁾この手紙はナサウィー自身と同じシハーブッディーンのラカブを持つ一書記の手になるものであり、内容は手紙文獨特の美辭麗句が鑲められながら、「互いに無關心で、協同する状況にない」⁽⁵¹⁾を取り上げ、友好と一致の門を開くことに努めなければならない」ことを訴えたものであった。ホラズムシャーの使者たるカーディーはカイセリ Oysariya でカイクバードの許へ到着し、手厚い歓迎を受けた。イブン・ビービーによれば使者の滞在中、カイクバードは彼を騎乗に誘って、ジャラルッディーンの経験して來た苦難の數々を聞き出し、ジャラルッディーンの娘一人を長子カイホスロウ Ghiyāth al-Din Kaykhusraw に妻合わせることを取り決めた。使者の歸還に當たつてカイクバードは多額の褒美を与え、返書と共に送り出した。返書の内容はホラズムシャーの呼びかけに應えて「すでに築かれた友好の基礎を對話や合圖を繼續することで強化する」ことを期待したものであった。⁽⁵²⁾ナサウィーによればカーディーが戻った時にはすでにティフリス攻略が終わっていたという。この時点までのルーム・サルタナトとホラズムシャーの関係には何らの對立點も見出せない。

ところが、前述したようにアイユーブ朝内部のアシラフ、ムアッザム兄弟の對立が各々の同盟者としてホラズムシャーとルーム・サルタナトをも巻き込んだことにより、アシラフとジャラルッディーン間にアフラトをめぐる對立が生まれ、兩者の關係にも變化が起き始めた。イブヌルアスィールによれば六二三年シャバーン月（二二六・七・二八—八・二

五) ルームのスルターン、カイクバードはアシラフとの同盟に基づき、ムアッザム側に附いたアーミド領主のアルトゥク朝マリク・マスウード al-Malik al-Mas'ud を攻めた。ルーム軍がヒスン・マンスール Hisn Mansur その他を征服するとマスウードはアシラフに和を請い、アシラフはこれを容れてカイクバードに征服地の返還を求めたが、カイクバードは「私はアシラフの意のままになる代理ではない」と言つて拒否した。アーミドへの救援にアイユーブ朝側はハマウィーの舊主ハーフィズと後にアフラートでハージブ・アリーを逮捕したアイベグを送り、武力を行使してルーム軍を撤退させた。⁽⁵⁴⁾ この事件は特にルーム・サルタナトの側にアイユーブ朝に對する不信感を募らせる原因となつた。更にルームとアイユーブ朝の間にはエルズルムをめぐる問題があつた。エルズルムには當時ルームのセルジューク朝の一族ジャハーンシャール Rukn al-Din Jahānshāh b. Tughrishāh b. Qilich Arslān ⁽⁵⁵⁾ がおり、この王は従兄弟のカイクバードに従わず、アシラフの名で *khuṭba* を讀ませてアイユーブ朝の宗主権を認めていた。ルーム・サルタナトの對アイユーブ朝、對ホラズムシャー關係は完全にその支族であるエルズルム王の動向によつて決定されたと言つても過言ではない。

六二四年にルームとアイユーブ朝間に結ばれた關係は後に大きな影響を有した。カイクバードは前年のアイユーブ朝の行動に對する不信と不滿にもかかわらず、アイユーブ朝と姻戚關係に入つたのである。すなわちカイクバードはアイユーブ朝のカミル、アシラフ、ムアッザムの姉妹である女性を妻に迎えた。イブン・ビービーはこの結婚にまつわる交渉を詳しく伝え、マラトヤ Malatya で盛大な結婚式が舉行されたことを記している。⁽⁵⁶⁾ ルームとアイユーブ朝間の姻戚關係が六二四年の何月頃に結ばれたのか明確な記録はないが、イブン・ビービーはカイクバードが結婚後すぐカイセリを経て恆例の冬營地である地中海岸のアンタリヤ Antalya へ向かつたことを記している。六二四年の終わりに近い頃であつたと推測される。この時期には前述のようにアフラートをめぐつてのアイユーブ朝とホラズムシャーの對立は決定的なものとなつており、カイクバードはアイユーブ朝との姻戚關係を結ぶことにより、基本的に對アイユーブ朝關係を重視する方針を選んだのである。

かくしてルーム・サルタナトとアイユーブ朝の間には姻戚関係を基盤に一度は友好と同盟の状況が現れたが、翌六二五年に關する諸史料の記述はこの同盟關係が一轉冷却化したことを示している。原因はカイクバードによるエルズインジャン Arzinjan 征服であつた。當時のエルズインジャンには大セルジュク朝のアルプ・アルスラン以來の傳統を有するメングエジク Mangujik 朝のダーウドシャー 'Alā' al-Dīn Dāvūdshāh がおり、カイクバードはこの王と家臣の不和を利用して無血でエルズインジャンを征服した。イブン・ビービーによれば事前にカイクバードの意圖を察知したダーウドシャーはエルズルムのジャハーンシャー、アイユーブ朝のアシラフ、ジャラールッディーン、更にイスマール派にまで救援を求め、アシラフはこれに答えてアフラートのハージブ・アリーをエルズインジャンへ送つたという。但しこの記事はアラブ語の史料と一致せず、イブヌルアスィール及びハマウィーによればハージブ・アリーはエルズインジャンの征服後、ジャハーンシャーの要請でエルズルムへ向かつたことになっている。⁽⁵⁷⁾ いずれにせよ六二五年のカイクバードによるエルズインジャン征服はルームとアイユーブ朝間に一時的な緊張状態を生み出し、イブン・ビービーの表現によれば「マリク・カーミルとアーディルの子孫の側からスルターン（「カイクバード」）の心の葉に嫌惡の埃が降りかかつた」のである。ルームとアイユーブ朝間の關係惡化の影響はそのままルームとホラズムシャーの關係に反映された。ハマウィーは史書中に六二五年シャッワール月十二日（一二二八・九・十四）附のジャラールッディーンよりスルマリ Sumari の領主 Husām al-Dīn Khidr への書簡を收録しているが、その内容はハルハール Khalkhal 地區の Firuzābadh 要塞に籠城したアタバグ・ウズベグの舊臣 'Izz al-Dīn Balabān を降服させた後、シリア、アルメニア進軍の意思を表明したものであつた。⁽⁵⁸⁾ 續いてナサウィーによれば、ジャラールッディーンはアフラト方面へ進みエルジシから Tūstāb⁽⁵⁹⁾ へ到着し、十日間滞在した。滞在中にルームから手紙が来て、カイクバードはホラズムシャーにアイユーブ家への敵對を唆し、彼らに對抗してジャラールッディーンを援助することを誓つたという。ナサウィーによるとカイクバードは「今やかの不正の輩、專制者の群に意を用うる他はない」と言い、「我々は小さなジハードから大きなジハードへ戻つた」とまで誇張した⁽⁶⁰⁾ という。こ

ここに言う「不正の輩、専制者の群」とは明らかにアイユーブ朝勢力を指し、ルームとホラズムシャーの協力により、アイユーブ朝に對する「大きなジハード」が呼びかけられているのである。この記事に據る限り、ルームとアイユーブ朝の不和はルーム側がアイユーブ朝に敵對してホラズムシャーに協力を申し出るまでに深刻化していたようである。

ルームとアイユーブ朝の對立は六二六年に入っても續き、ハマウィーは六二五、六年に各一度ルームの軍隊がジャズィーラに侵入したことを傳えている。このような敵對關係はしかし、ジャラルッディーンの第二次アフラート攻圍の期間に再び急轉回を見せた。原因はエルズルムのジャハンシャーがアイユーブ朝側からホラズムシャーの側へ移ったことによる。ナサウィーも記すようにジャハンシャーとジャラルッディーンの間にはこれまでも問題がなかった譯ではなかったが、アフラート攻略も近いと見たジャハンシャーはカイクバードに對する敵意とジャラルッディーンに對する畏怖から、敢えてジャラルッディーンの側に身を投じたのである。ジャハンシャーはアフラート攻圍中にホラズムシャーの軍隊に飼葉を給し、*garā bughrā* と呼ばれる大弩砲その他の攻城兵器をエルズルムから送ってアフラート征服を助けた。しかもイブン・ビービーによればジャハンシャーはジャラルッディーンにルーム地方の征服を勧めた⁽⁶³⁾という。この事件後のルームとアイユーブ朝及びホラズムシャーの關係はイブン・ビービー、ハマウィー、ナサウィーに詳しい記録がある。イブン・ビービーによればジャラルッディーンはルームへ三人の使者を送り、彼らはカイクバードの地中海岸の冬營地アラシャ *‘Alāṣya* でスルターンと會見した。その際カイクバードがホラズムシャーの使者に語ったという言葉の内容はカイクバードからジャラルッディーンへの最後通牒の性格を持っていた。すなわちカイクバードはジャラルッディーンにアフラートからの撤退を要求し、イスラーム教徒全體のためにモンゴル軍との講和を迫っていたのである。⁽⁶⁴⁾ハマウィーの史書にはカイクバードがジャラルッディーンに送った最後の手紙が簡潔な形で收録されている。その内容は當時のルーム、アイユーブ朝、ホラズムシャー三者の關係を如實に示しているように思われるので以下に譯出する。

貴下 (*al-mawālā*) は偉大な一族 (*bayt*) の出である。汝らの狀況は汝の父が善志を變えて命を粗末に扱うようになるま

では損われることがなかった。そして彼は受けるべき罰を受けた。今や私はアイユーブ家に好意を抱き、愛情を感じている。彼らは幸多い偉大な一族で、その起源は古い。彼らは軍隊、民衆、鄰人をよく扱い、財産 (wealth)、所領 (biad)、配下 (tial)、子孫 (awlad)、實力 (quwa) を有している。一方汝には財産も、配下も、實力もない。汝の所領は荒らされてしまっている。我々は汝のことは汝よりよく知っている。私を彼らの敵と思うな。アッラーにかけて私は彼らの敵ではない。それどころか我々の間にある親縁關係・姻戚關係により私は彼らの友であり、親類である。

私の伯父 Mu'izz al-Din⁽⁶⁹⁾ には彼らの血を承けた子孫があり、私にも彼らとの結婚から生れた子供がいる。確かに我々の間には汝が非難したような事態が起こったことはある。しかし我々はかつてのような状況へ戻った。これ以外のことを信ずるな。私にとっての得策は汝が彼らと和解し、彼らを友とみなすように忠告することである。我々は汝の背後に汝が立ち向かうべき敵がいることを知っている。そして(我々の側の) 同盟關係は出來上がっている。グルジア人その他については汝の思うがままである。これが私の汝に對する忠告である。汝と書信を交わし、汝に服従を誓う者に騙されるな。そのどれもが嘘であり、時間稼ぎである。アッラーにかけて私は理性において、聖法 (shari') において必要なことを全て述べた。(T. M. pp. 167—168/192b—193a)

この手紙文の中に現れる「汝と書信を交わし、汝に服従を誓う者」とは當時の歴史状況の中でアイユーブ朝のアシラフへの服従を棄ててジャラールッディーンの側に付き、カイクバードとの對立を深めたエルズルムのジャハーンシャールとに他ならない。ホラズムシャールのアフラート征服を援助し、更にルーム征服を使喚していたかねて宿怨あるジャハーンシャールの行動に危機感を深めたカイクバードはエルズインジャン征服後の對立を棄てて姻戚關係を頼りにアイユーブ朝との同盟關係を復活させたことが明らかに前述の手紙より読み取れよう。ホラズムシャールによるアフラートの征服後ルーム・サルタナト側はアイユーブ朝のカミルと交渉してジャラールッディーンに對する同盟を熱心に説いた。イブヌルアスィールによればハッラーンに居たカミル、アシラフ兄弟の許へはルームから一日に五人もの使者が到着したこともあ

(66)

ったという。イブン・ビービーはカーミル、アシラフの許へ派遣されたルームの使者カームヤールが二人に向かって、

もし汝らがこの援助を惜しめば、明日にも我々はアッラーに保護を求める―汝らはスルターンの妻が見知らぬ者の手中に落ちるのを見るであろう。その後に悔やんでも、怒りに齒軋りしても無駄である。(A. A. p. 385)

と語ったことを傳えているが、ルーム側がスルターンの妻、すなわちカーミル、アシラフの姉妹との姻戚關係に縋って同盟關係の交渉を進めていたことは前記のハマウィーが收録する手紙の内容ともよく符合する。最終的にアイユーブ朝側はジャラールッディーンに對抗してルーム・サルタナトと同盟を結ぶことに決し、アフラートをめぐるアイユーブ朝とホラズムシャーの對立はアイユーブ朝とルーム・サルタナトの連合軍とジャラールッディーン率いるホラズムシャー軍との軍事的衝突にその結着を見出すこととなった。互いの友好と同盟への呼びかけから始まったルームとホラズムシャーの關係は曲折を経てエルズルム王の歸趣をめぐって妥協の餘地のない敵對關係へと變わって行つた。ジャラールッディーンの方でもアフラート征服に至る經緯を通じてルームを支配するセルジュク朝並びにシリア、エジプトを本據とするアイユーブ朝との全面的な軍事對決を辭さなくなった。前述のアフラート征服後、ジャラールッディーンが出した *fatḥ-nāma* 中に表明されたシリア、ルーム征服の意欲はこのような状況においてよりよく理解されよう。

四 ヤッス・チメンの戰

ホラズムシャーとの會戰が必至となつた状況でカイクバードはアミールのチャヴルィ *Mubāriz al-Dīn Chāwli chāsh-nīgr* ら四名の率いる一萬の軍をエルズインジャンへ送り、ハマウィーによれば更に一萬をマラトヤへ送つた。(67) アイユーブ朝側ではカーミルがエジプトへ出發した後、アフラートからアシラフの妹婿のカイムリー *Husām al-Dīn Qaymūrī* がラッカ *al-Raqqa* (69) へ脱出して來てジャラールッディーン率いるホラズム軍がアフラート攻圍で消耗甚だしく、手強い敵ではないことを知らせた。その後ルームから使者としてカームヤールがアシラフの許を訪れ、アシラフの出馬を迫つた。ハ

マウイーによればアシラフは六二七年シャアバーン月(一二三〇・六・十五・七・十三)ラッカを發つてカイクバードの待つスィヴァス Sivas へ向かった。イブン・ビービーはアシラフには兄弟でマイヤーファアリキーン Mayyafarīqīn 領主ムザッファル・ガーズィー al-Malik al-Muzaffar Ghāzī を初め Malik Jawād, Malik Muḥith Malik 'Aziz のアイヌーブ家諸王が同行したことを傳え、ハマウイーはこの他に自身の當時と將來の二人の主人ハーフィズとマンスールの名を加え、イブヌルアスィールによればアイユーブ朝の兵力約五千であつた。⁽⁷⁰⁾ スィヴァスに着いたアシラフらは慰勞され、カイクバードがカイセリから呼んだルームのスルターンの妻となつてゐる姉妹と對面した。ルーム・サルタナトとアイユーブ朝の兩軍はスィヴァスでの一週間の休養後アクシヒル Aqshahr の草原へ向かい、ここから更にエルズインジャンに近いヤッス・チメン⁽⁷¹⁾の牧地へと進んでゐた。カイクバード自身に従うテュルク、ファラング、グルジア人、Djir ルーム人、ルース、アラブから成る兵力は二萬であつた。

一方ジャラールッディーンはアフラートの征服後マラズギルド Malazgird 包圍に向かい、更にハルプトまで進んだが、この地でナサウイーによれば回復の見込みがない程の重病に罹⁽⁷²⁾つた。エルズルムのジャハーンシャアの獻策によりルーム・サルタナトとアイユーブ朝が連合軍を形成する以前にそれぞれ一方を叩く豫定であつたジャラールッディーンの戦略は彼自身の重病により完全に破綻した。にもかかわらずジャラールッディーンは病癒えて後、エルズルムのジャハーンシャーと合流し、ルームとアイユーブ朝連合軍がアクシヒル草原に到着したのを知ると夜中の強行軍をもつてヤッス・チメンへ到達した。

ヤッス・チメンの戦の模様はイブヌルアスィール、ナサウイー、イブン・ビービー、ハマウイーがそれぞれに記述してゐる。このうちナサウイーは彼自身當時ジャラールッディーンの使者としてイラク方面へ派遣されており、決戦のあつた當日にはイスファハーンに到着してゐたと述べてゐる。それ故ナサウイーは戦いの模様を戦後使者としてその許へ赴いたマイヤーファアリキーン⁽⁷³⁾のアイユーブ朝領主ムザッファル・ガーズィーより傳へ聞いた話として記述してゐる。イブ

ン・ビービーは戦いの模様を二七九對句のマスナヴィー體ムタカリブ韻の自作詩によって敘述している。この二七九對句のマスナヴィー詩はイブン・ビービーの史書中最長の韻文部分であり、作者自身がカイクバードとホラズムシャーの決戦を並々ならぬ熱意と共感を込めて、しかもペルシア文學史上最大の敘事詩『シャー・ナーマ』に倣った文學性を帯びさせて描寫しようとしたことは明らかである。一方ハマウィーは當時の主人ハーフイズと共に會戰の現場に居合わせたことは確實で、アイユーブ朝側の參戰記錄としてこれ以上のものはない。⁽⁷⁵⁾ イブヌルアスィルは戰の描寫は少いが、その正確な日附を提供してくれる。これら四つの史料の記錄を總合するとヤッス・チメンの戰いの模様は以下の如くである。

六二七年ラマダーン月二四日(二三〇・八・六)エルズインジャン駐在のルームのアミール、チャヴルイは三千騎を前衛としてカイクバードの許へ向かわせた。この前衛はその夜本隊と離れてしまい、翌朝ジャラールッディーンの派遣した一軍と遭遇し、激戰の末壊滅した。この敗戰の報を聞いたカイクバードは大いに失望して撤退を考えるまでに取り亂したが、アシラフラアイユーブ朝諸王の激勵で氣を取り直したという。翌二五日と二六日には兩軍の前衛同士が一進一退の衝突を繰り返した。二七日には本隊同士の激突が始まり、二八日の決戰でホラズムシャー軍は連合軍の奮闘の前に總崩れとなった。この戰いでアシラフ初めアイユーブ朝諸王の率いる軍勢が目覺しい働きを見せ、ルームとアイユーブ朝連合軍の勝利に大きな役割を果たしたことはイブヌルアスィルとハマウィーの記錄から明らかである。そしてアイユーブ朝軍活躍の背景にはカイクバードによる破格の厚遇があった。ハマウィーはルームのスルターンがヤッス・チメンの戰前後にスィヴァスとエルズルムで計四十萬スルターン・デイルハムの現金、二萬杯(creckku)の穀物、一萬頭の羊をアシラフに、彼の兄弟にはそれぞれの地位に應じて各人に十萬デイルハムと多數の馬、服地等を與えたことを記し、「これは大層なことであった」と附け加えている。⁽⁷⁶⁾ またイブン・ビービーによれば二七日の激突前夜はイスラームの預言者ムハンマドに最初の啓示が下されたとされるカドルの夜に當たり、カイクバードは斷食をし、罪人の放免、貧民への喜捨を命じ、一睡もせず禮拜と祈禱に時をすごしたという。この記事は宗教に縋ってでも勝利を得ようとするカイクバードの執念を示したも

のである。アイユーブ朝諸王への破格の厚遇とカイクバード自身の勝利への執念という物心両面の要因が相俟ってルームとアイユーブ朝連合軍の奮闘を生み出し、連合軍は強敵ジャラールディーンに打ち勝ったのである。

ジャラールディーンは敗戦後、ハルプト、マラズギルドを経てアフラートに立寄り、攜行出来るだけの財を持ってアゼルバイジャンのホーイへ到着した。ハマウィーによればホラズムシャー軍は戦場近くの山や谷に逃げ去って一部の者は黒海岸のトラブゾン Durabzun にまで到達したという。ルームとアイユーブ朝連合軍は勝利を得たものの、ホラズムシャー軍の潰走を當初は策略かと疑い、後に追撃に移ってエルズルムのジャハーンシャー以下多数を捕虜とした。決戦の行なわれた二日後のラマダーン明けの祝日を祝った後連合軍は捕虜としたジャハーンシャーを連行してエルズルムへ向かった。エルズルムの町は初め連合軍に對して門を閉ざしたが、アシラフが仲介に立って領主ジャハーンシャーの生命保證と引換えに開城を成功させた。エルズルムでカイクバードは前述のようにアイユーブ朝諸王の戦功を賞した後ルームの Amir, アルトゥンアパ Shams al-Din Altun-apa chāshnīr に五千の兵を與えてアフラートへ向かうアシラフに同行させた。アシラフがアフラートを回復し、アゼルバイジャンのジャラールディーンとの間で講和が結ばれることによりヤッス・チメンの戦の原因となったアフラートの問題は最終的に解決した。

ヤッス・チメン戦後の事態が一應落着いた頃ホラズムシャー、ジャラールディーンの背後にはモンゴル軍が迫っていた。チンギス・ハンの後繼者ウゲデイがジャラールディーン追討のために派遣し、後フラグの西征までアゼルバイジャンを根據地としたチョルマグン・ノヤン率いるモンゴルのタマー軍がアム河を渡ってイラン進撃を開始したのである。以後ジャラールディーンの命運はモンゴル軍の手中に握られ、組織的な抵抗は出来ぬまま六二八年シャッワール月十五日に勇猛を以て知られた最後のホラズムシャーはディヤール・バクル地方でクルド人の手にかかって最期を遂げた。チョルマグン到来以降のジャラールディーンの行動についてはジュヴァイニー、ナサウィーに詳しい記録があり、既にドーソンがそれらを利用してホラズムシャーの最末期の状況をまとめているのでここでは觸れないこととする。但し、ヤッス・

チメンの戦との関連でいえば、ジャラールッディーンは、ジュヴァイニーの表現によると、ヤッス・チメンの敗戦という「したたかに彼の幸運の頬を打った打撃からまだ全く回復出来ていなかった」⁽⁷⁷⁾うちにチオルマグンの來襲を受け、逃亡の果てに命を失った。ジャラールッディーンがイスラーム教徒の敵モンゴル人に抵抗したホラズムの「英雄」であるとするなら、彼の最期に直接の原因となったヤッス・チメンの戦は彼の生涯上最も重大な事件であつたとはいえないであらうか。

おわりに

イブヌルアスィール、ナサウィー、ジュヴァイニー、イブン・ビービー、ハマウィーという五つの史料を基にこれまでホラズムシャー、ジャラールッディーンとアイユーブ朝のアフラトをめぐる対立、ルーム・サルタナトとホラズムシャー、アイユーブ朝の交渉経過、ルームとアイユーブ朝連合軍對ホラズムシャー勢力の決戦となつたヤッス・チメンの戦について述べて來た。これら諸事件の背景、経緯を明らかにするために前記五者の史料記述のいづれをも慎重に検討して當時の歴史状況を再構成しなければならない。その際には當然のことながら史料の性格、つまり史料作者のおかれていた立場が問題となる。この點で五人の史料作者のうちルーム・サルタナトともアイユーブ朝とも、又ホラズムシャーとも直接の利害關係を持たなかつたイブヌルアスィールの記録は特に尊重されねばならない。當時マウスィルに在住した歴史家の眼に同時代を生きたジャラールッディーンの活動はどのように映じたのであろうか。またルーム・サルタナトにとって、アイユーブ朝を含む當時の西アジア全體にとってジャラールッディーンは如何なる存在であつたのか。この二點を以下に明らかにすることで本稿の結びとしたい。

イブヌルアスィールは『完史』中で彼にとつてジャラールッディーンの生死が尙不明であつた六二八年の記事としてジャラールッディーンについて以下のように書いている。

ジャラルッディーンは行ない悪く (sayyi al-sira) 王權 (mulk) に關する施策も醜くかった。彼と鄰接した諸王のうち彼と敵對し、王權を爭い、鄰人たる關係を惡化させなかつた者は一人もいなかった。彼がイスファハーンに現われ、兵を集めた當初から彼はフーズイスターンを狙い、ハリーフアの領地トウスタルを包圍し、これもハリーフア領のダクーカーへ進軍して掠奪し、多くの人を殺した。その後ウズベグの領土アゼルバイジャンを得てグルジアに攻め入り、彼らと對戰して打ち破つた。次にアフラートの主マリク・アシラフと敵對し、更にルームの領主アラウッディーンと敵對し、イスマーイール派とも敵對して彼らの領土を掠奪し、多くを殺した。彼らには毎年税 (mad) が割當てられた。他の者に對してもこのようであつたので王達は皆彼に失望し、誰も彼を援助しなかつた。(K. T. pp. 495-496)

イブヌルアスィールのジャラルッディーンに對する評價はその第一次アフラート攻圍の記事以降明らかに惡化した。六二三年のティフリス攻略を「大手柄」と絶賛したイブヌルアスィールはアフラートをめぐる對立が始まつた同年後半の記事から一轉してジャラルッディーンと彼の率いるホラズム軍の「行ないの惡さ」を度々擧げている。su' sira, sira jairā, su' sanī, qabīh, fi'ī などの表現で現れるホラズムシャー及びホラズム軍の「惡行」は『完史』の末尾に至るまで六箇所に現れる。⁽⁷⁸⁾ またジャラルッディーン及びホラズムシャー軍の行動に關してイブヌルアスィールは「掠奪 (NHB)」の語を名詞、動詞併せて二五回使用している。イブヌルアスィールの記事に據る限り、ホラズムシャー軍の行くところ必ず掠奪有りという印象を與えられるのは基本的にジャラルッディーン率いるホラズムシャー軍が掠奪者の集團として當時の西アジアにおいて否定的な評價を受けていたからではないか。

これに關連してイブン・ビービーの史書中にはジャラルッディーンとその配下のホラズム人たちの置かれていた狀況を呼ぶ語として yāwagī なる語が三箇所に現れることに注目したい。⁽⁷⁹⁾ yāwagī とはペルシア語で「道に迷う、消え失せる」の謂であるが、この場合は「頼る者もなく當て所なく彷徨う」という意味で用いられている。⁽⁸⁰⁾ すなわちモンゴル軍の

侵攻により故國を去らねばならなかったホラズムシャー、ジャラールッディーンを初めとするホラズム人たちは基本的に「土地も家財もなく、yavagīの状態で各地を巡る」yavagīyānとなっていたのである。頼る者をもたず、鄰接する全ての勢力と敵對せねばならなかったホラズム人たちは生活の手段として掠奪に頼らざるを得ず、彼らの掠奪は西アジアの人々の眼には「行ないの惡さ」としか映じなかった。如何にホラズムシャー、ジャラールッディーンが鄰接する諸勢力に友好を提案し、同盟を訴えようとも彼の率いるホラズム人が各地で行なっていた掠奪はその提案を拒絶し、訴えを斥けるに足るだけのものがあつたのである。ジャラールッディーンが西アジアでの活動の據點としたアゼルバイジャンの各都市ではホラズムシャー勢力に對する不満は一層大きく、ヤッス・チメンの敗戦後一年もたたないうちにモンゴル軍にアゼルバイジャンを追われ、逃亡したディヤール・バクル地方で非業の最期を迎えなければならなかったジャラールッディーンの運命そのものがアゼルバイジャン住民の彼の行動に對する不人氣と非協力を物語っている。

にもかかわらず西アジアの諸勢力がヤッス・チメンの戦に至るまで積極的にジャラールッディーン率いるホラズムシャー勢力を排除しようとしなかった理由は三つ考えられる。第一には大セルジュク朝以來長年に亘つて西アジアの諸勢力が試みながら不成功に終っていたグルジアへの遠征、就中ティフリス攻略に成功したホラズムシャーの軍勢力に對する怖れである。第二はアイユーブ朝のムアッザムやルームのスルターン、カイクバードの一時の姿勢に見られるように西アジアの對立する諸勢力がホラズムシャーの軍勢力を自らの勢力擴大に利用しようとしたことであり、アフラートをめぐる對立は正しくこの點に原因がある。第三は西アジアの諸勢力がホラズムシャーにモンゴル人に對する防波堤の役割を期待したことであり、ジャラールッディーン自身もルームやシリアの支配者たちにこの點を強調して援助を求めようとしていた。ジュヴァイニーによれば、ヤッス・チメンの敗戦後モンゴルのタマー軍到來を前にしてジャラールッディーンがハリフア、ルーム、シリアへ送つたという手紙の中に「私は汝らのイस्कандールの防壁(sadd-i Iskandar)である」という表現が現れる。⁽⁸¹⁾ イスラームの聖典『クルアーン』第十八章九四節に出典を求められる「イस्कандールの防壁」⁽⁸²⁾なる語は傳説

上の英雄ズルカルナイン *Dhu al-Qarnayn* が惡事を働くヤージュージとマージュージを封じ込めるために築いた防壁を意味し、ジャラールッディーンは自らを異教徒モンゴル人に對する「イスカンドルの防壁」に擬えて防壁により恩恵を受けるイスラーム教徒からの援助を要求していた。そしてこの「イスカンドルの防壁」の本質が掠奪者集團の「壓制」(*qawr wa qulm*)、暴虐 (*jabarut*)、高慢 (*azama*)⁽⁸³⁾ 以外の何ものでもないことが明らかになり、現實にアフラト征服とエルズム王の離反という對立の焦點が浮上した時、アイユーブ朝とルーム・サルタナトは共同して自らの手で防壁を破壊せねばならなかったのである。

最後にルーム・サルタナトとホラズムシャー間の對立の背景にあつた王朝間の對抗意識について指摘しておきたい。ハマウィーの史書中に次のような一節がある。

その後ホラズムの主はルームの主に百二十頭の馬と共に使者を送った。ルームの主は使者を呼び出したが、彼を迎えるために立上ることなく、誰も使者を迎え入れなかった。數日が過ぎ、歸還の時が來た時もルームの主は立上らず、接吻を受ける手も出さず、勞いの言葉もかけなかった。ルームの主の習慣は誰にも話かけないことであつたが、使者に次のように言つた。「汝の主人が汝の受けた待遇と配慮の少なさを批判したなら次のように言え。これが我が父の汝の父に對する、我が祖父の汝の祖父に對する習わしである。」と (*T. M. pp. 185—186/186a*)

イブン・ビービーはカイクバードの言葉として、ホラズムシャーの祖先達を「スルターン、マリクシャー、スルターン、サンジャル *Mu'izz al-Din Sanjar* その他の偉大なセルジュクのスルターン達—アッラーが彼らの渴きを潤すように—のような我々の伯父達 (*aman*) の慈悲と恩寵の眼差で常に視られた者たち⁽⁸⁴⁾」と呼んでいる。この二つの記述の背後には明らかにかつての大セルジュク朝のマムルーク出身のホラズムシャー朝に對する當時のルームのセルジュク朝スルターンの自負と優位の念が窺われる。ジャラールッディーンはアゼルバイジャンでイラクのセルジュク朝スルターン、トグレイルの娘と結婚したが、トグレイルを殺害し、大セルジュク朝の血統を滅ぼしたのは他ならぬジャラールッディーン

祖父テキシであった。ルームのスルターン、カイクバードにとって系統は異なるもののホラズムシャー、ジャラールッデーンとの対決はこうした歴史的経緯から一族の復讐、雪辱と意識されていたかもしれない。ヤッス・チメンの戦のルーム・サルタナトにとって最大の原因となったエルズルムの分家の動向への對處も含めてルームのスルターン、カイクバードにはかつての榮光あるセルジューク家の支配をたとえ一部なりとも復活させようとする歴史的な意識が働いていたことも強く否定するべきではない。

註

- (1) スルターン・ジャラルッディーンの名についてはドーソン以来 Mengibriti と讀むべきであるとの説が支配的であったが、ジュヴァイニーの『世界征服者史』を校訂した Muhammad Qazwini はその第二巻の *hawashi wa idafat* の中で同時代史料に現れるジャラルッディーンの本名の表記は MNKBRYN であることを確定した。但しこの表記の読み方及び語義については不明であるとする。T. J. p. 284—292.
 - (2) ドーソン著、佐口透譯注『モンゴル帝國史』第一卷第七章、第四卷第一章、平凡社東洋文庫、昭和四三、四八年（以下ドーソンⅠ、ドーソンⅣと略）。
 - (3) ドーソンⅣ四二—四八頁。
 - (4) ドーソン序論九—一九頁。
 - (5) 刊行地は Leiden。以下イブヌルアスィールの『完史』引用の頁は特に注記しない限り第十二卷（ヒジラ暦五八四—六二八年）のものである。
- (6) *Histoire du sultan Djelal ed-Din Mankobriti, prince de Kharizm*, Paris 但し Houdas のテキストは數々の缺陷を指摘され、現在では一九五三年カイロで刊行された Hefz Ahmad Hamdi 校訂本がよく利用される。筆者の引用した『スルターン・ジャラルッディーン傳』の頁もこの版本に據る。尚、ナサウイーの *Stra* はすでにヒジラ暦七世紀にペルシア語に翻譯されており、そのテキストは一九六五年に Mujtaba Minawi によって刊行された。Sira-i Jalal al-Din MYNKBRYN, Tihraan のペルシア語譯は計二十章が省略され、譯者不詳であるが、ミノーヴィーによる入念な解説と共にナサウイーのアラブ語原文の理解を大いに助けるものである。
 - (7) 刊行地は Leiden。筆者所引の頁はすべて『世界征服者史』第二巻のものである。
 - (8) アルメニア（現トルコ共和國內）のヴァン湖北岸にあるこの町の名はアラブ語の表記はヒラート *Khatat* であるが、ペ

ルシア語では *Akhiat* である。本稿では史料引用の場合を含めてアフラートと統一しておく。

- (6) F. Rosenthal, *Ibn al-Athir, Encyclopaedia of Islam*, New Edition.

- (10) *Stra*, p. 34. ドーソン序論一二頁。

- (11) 勝藤益『モンゴルの西征—ペルシア知識人の悲劇』創元新書、一九七〇、二二二頁。

- (12) ドーソンⅣ四二頁原注所引のトルコ語寫本『ルーム・セルジューク朝史』とは M. Th. Houtsma の校訂で刊行されたトルコ語譯の *Tawārikh-i Al-i Saljūq* のことである。
Histoire des Seldjoukides d'Asie Mineure d'après Ibn-Bibi, texte turc, Leiden, 1902. このトルコ語テキストはドーソンが参照した部分の直後で終っており、この史料に據る限り、ドーソンの利用しえた段階ではルームとホラズムシヤールの関係の結末は不明であった。

- (13) この史料については拙稿「バーバーの反亂について」『昭和五九・六〇年度科學研究費(總合研究A)研究成果報告書—イスラム圏における宗教運動に関する總合的研究』(研究代表者 護雅夫)昭和六一年、六三頁参照。

- (14) シャーフィイー派のファキフ。五五〇年(一一五五/六)ニシャーブールを武力占領したグッス族により殺害された記事がイブヌルアスィールの第十一卷二〇一頁に見える。

- (15) ルームのスルターン、カイクバードの信頼厚かったアシール。その最期については拙稿「モンゴル侵入直前のルーム」

『オリエント』三〇—一、一九八七、三—五頁参照。

- (16) ヒジラ暦七四〇年に完成した Hamd Allah Mustawfi Qazvini 著作の *Nuzhat al-Qulub* (ナズ・N. Q. と略) に於ては *Gūr-i Sukh* (赤い墓) とはグルガンにあったシーフ派第六代イマーム Ja'far al-Sādiq の息子マハンマドの墓廟 (turban) のことである。Guy Le Strange 校訂本 Leiden, 1915, p. 159.

- (17) アラムートのイスマーイール派第七代首領アラウッディーン・ムハンマド三世(在位六一八一—六五三年)。

- (18) イブン・ジョビーという呼稱はナサブであるが彼の場合は例外的に母親の名ビービー・ハートゥーン(ビージョー・ムナシブ)を取っている呼ばれている。

- (19) A. A. p. 10.

- (20) 例えば六六五頁の *uluḡh qutluḡ inānch a'zam ṣāḥib dīwān al-mamālik Abū al-Ma'ālī 'Aṭā Malik* の形にアターリックが、七〇七頁の *ughurlū inānch qutluḡ khudāwānd khwā'ia-yi jāhān ṣāḥib dīwān al-aqālim Muḥammad b. Muḥammad* の形にムハンマドの名が現れる。

- (21) A. A. pp. 368, 489, 490.

- (22) П. А. Грязневич (издание текста, предисловие и указатели) Москва, 1960. このテキスト版テキストの存在については佐藤次高氏の御教示を得た。

- (23) *al-Tārikh al-Mansūrī Talukhīs al-Kashf wa al-Bayān fī Hawādith al-Zaman*, Dimashq, 1401—1981.

- (24) ハヤウィーの『ペンヌール史』の引用頁は Dawdaw 校訂

テキストの頁／ファクシミリ版テキスト葉數表裏によつて示す。

- (25) アイユープ朝の名祖アイユープの兄弟 *Shirkuh* の孫(在位五八一—六三七年)。

- (26) *A. A.* pp. 487—490.

- (27) 馬の補給については *K. T.* pp. 426—427. ナサウィーによればバグダードのハリーファの許へ送られた書信の内容はハリーファを悩ませ、その行動を非難するものであったという。*Strq.* p. 192. 更にアラブの史家スィフト・イブヌルジャウズィーによれば、ジャラールッディーンはディマシクのムアッザムに手紙を送り「ハリーファは私の父の滅亡の原因となり、異教徒達が領土に到来する原因となったが故に我々はハリーファを狙うのである。我々は彼がヒタイ *al-Khiṭā* へ送った何通かの手紙と彼が彼らに領土、馬、*khiṭā* を約束した署名を見つけた」と知らせたとする。Sibt Ibn al-Jawzī, *Mir'at al-Zamān fi Tārīkh al-Āyūn*, al-Qism al-Thāmin, al-Juz' al-Thāmin, Haydarābād al-Dakan, 1962. (イブ *M. Z.* 訳) p. 634.

- (28) *Strq.* p. 197.

- (29) *K. T.* pp. 452—453.

- (30) *K. T.* p. 453. ユーニン *N* 二二頁。イブヌルアスィールによればババーヌス朝のハリーファ、ナースィル *al-Nāṣir li-Dīn Allāh* (六二二年ラダーン月末日—一二五・十・五夜)在世中にハリーファはアイユープ朝のカーミル、アシラフと不和になり、自分の味方としてイルビル領主のキョクビ

・リ *Muzaffar al-Dīn Kikburī* 及びディマシクのムアッザムと同盟したという。*K. T.* pp. 463—464. カーミル、アシラフとムアッザムの対立の發端はムアッザムのカーミル、アシラフ兄弟に對する不信任とハリーファの介在が原因となつたといふのである。この間の事情は *Hans L. Gottschalk, al-Malik al-Kāmil von Egypt und seine Zeit*, Wiesbaden, 1958, SS. 121—132. 及び *R. Stephen Humphreys, From Saladin to the Mongols—The Ayyubids of Damascus, 1193—1260*, Albany, 1977, pp. 170—184. に詳しい。

- (31) *T. M.* pp. 120—121/153b—154a.

- (32) ちとカラヒタイ(西遼)のグルハン *Kurkhan* のハーンに、ホラズムシャー、マンマドの許へ使者として來たが、歸還を許されず、マンマドに仕えるようになった人物。*Strq.* p. 174. ユーニン *N* 七—八頁。

- (33) *K. T.* pp. 455—456. ユーニン *N* 二二頁。

- (34) 攻圍の模様はユーニンの記載參照 *N* 二四頁。*K. T.* p. 461, *T. M.* p. 130/156b—157a. *Strq.* p. 217.

- (35) *Humphreys* のこの間アシラフがディマシクのムアッザムの許で實質的な幽囚の身にあつたと解釋してゐる。*op. cit.* p. 182.

- (36) *K. T.* p. 464.

- (37) *K. T.* p. 471, *T. M.* pp. 152—155/167b, 168a, *Strq.* pp. 267—276. ユーニン *N* 二五—二六頁。

- (38) *T. J.* pp. 176—177. ジャラールッディーンはアフラート征伐に成功した際、グルジアの將軍イヴァネ *Iwani* の娘で

アシラフの妻であつた女性を自らのものとし、自らの妻がハージブ・アリーに「身を許したことで胸中に燃っていた憎しみを晴らした」という。

- (39) K. T. p. 471, T. M. p. 153/167b, M. Z. p. 644.
 (40) カールがアシラフから得た地域はハムラーン、ルハー al-Ruhā' ラハカ al-Raqa' サルジ Sarj' ラースルアイン Ras al-'Ayn である。K. T. p. 484, ドーンンⅣ四六頁には「ジャメライン」なる地名が現れるが、イブンヌルアール原文には min al-Jazira 「ジャズミールのうち」の語がラースルアインの後に附されるのみである。
 (41) *Štra*, pp. 232—238, K. T. pp. 476—477, T. J. pp. 168—170, ユーンンⅣ二六—二七頁。イスファハーンの郊外でジャラルッディーンと戦ったタタル Tatar 軍とはイブンヌルアールによれば「彼らの王チンギス・ハーン Jinkiz Khān がその頭目 (muqaddam) に怒り、彼を遣はす、領土から追い出した」者たちであつたという。ナサウイーは軍を率ゐる六人のノヤンの名を擧げてゐる。
 (42) K. T. pp. 477—478, T. M. pp. 138—140/161a.
 (43) T. J. pp. 170—174, ユーンンⅣ二六—二八頁。
 (44) K. T. pp. 479—480.
 (45) T. M. pp. 156—157/168b—169a, 178—179/182a.
 (46) ハマウイーの史書にはヤッス・チメンの戦後ジャラルッディーンがアシラフに對して送った書信へのアシラフの返事が載せられている。その中に「汝の領土を狙つた者は、汝の主張した如く、我々は彼にその行ないの償いをせよ」といふ

う一節がある。これは明らかにアシラフがジャラルッディーンとの妥協のためハーシン・アリーを逮捕させたことを示している。T. M. p. 216/201b.

- (47) K. T. pp. 487—488, T. M. pp. 183—186/185a—186b, *Štra*, pp. 299—324, T. J. pp. 174—177, ユーンンⅣ二八—四五頁。
 (48) T. J. p. 179, 及び fatḥ-nama はハマーン Hamādān へ送られたものである。
 (49) *Štra*, p. 194, A. A. p. 367. 但し使者の名をナサウイーは 'Umar b. Sa'd として、ユーンン・ユーサーは 'Umar b. 'Umar とする。この人物がアイニョブ朝諸王の許可を得たことはユーンナーの記事から明らかである。T. M. pp. 115/152b, 123—124/154b, 215/201a.
 (50) A. A. pp. 368—370. 同図区図の書翰は Osman Turan, *Türkîye Selçukluları Hakkında Resmî Vesikalar* (トル・Vesikalar 文書), Ankara, 1958, s. 97—101, に収録されている。
 (51) ユーンン・ユーサーによれば、ファールスのアタベグ Abū Bakr b. Sa'd の姉妹とジャラルッディーンの間になれた女子 A. A. p. 371.
 (52) A. A. pp. 371—373, *Vesikalar*, s. 102—105.
 (53) *Štra*, p. 195.
 (54) K. T. pp. 458—459, T. M. pp. 130—131/157a, A. A. pp. 274—289.
 (55) T. M. p. 112/150b, *Štra*, p. 301, ジャハーンシャーの父

Mughith al-Din Tughhrishāh はカイタビーヌの父カイホ
クロー一世の兄弟であった。

(95) A. A. pp. 293—300.

(15) A. A. pp. 354—361, K. T. pp. 478—479, T. M. pp. 159/
170a, 161/171a.

(85) T. M. pp. 170—173/176b—179b.

(65) この地名はイン・ユーゴードと現れる。A. A. p. 432,
433. それによれば Tughlāb はフフラーからヘルズルマ
クの騎士である草原の英雄 Heinrich Hübschmann, Die
altarmenischen Ortsnamen, *Indogermanische Forschun-*
gen, Band XVI, 1904, S. 476. によればトラスギルトに近
い場所であるという。尚この文献の存在については北川誠一
氏の御教示を得た。

(98) *Strq*, p. 278.

(12) T. M. pp. 165/173a—b, 180/182b.

(92) ナハナーディヤレバ' ジャハンニシャーディ' は「大いじま
ラールの國運に對する罪 (dhunub) があり、彼はジャハ
ンムルクに對してハージン・フリーを援助した結果に氣附
くじだ」といふ。 *Strq*, p. 301.

(93) A. A. p. 384.

(94) A. A. pp. 376—380.

(96) トビキヤを領した Mu'izz al-Din Qayṣarshāh の子。
カイタビーヌの伯父の一人。A. A. p. 22.

(98) K. T. p. 489.

(95) A. A. pp. 384—385, T. M. pp. 195—196/192b.

(68) カールルのエジプト歸還の原因は、ハッワーリーによれば、
カールルの子でヤマンを領してつたマリク・ブメウール
Agāsī 死後の状況に基處するたためである。T. M. pp.
200—202/194a—b.

(88) T. M. p. 202/194b, *Strq*, p. 323. QYMRV のヒクベ' を
「フツール」トナーマディヤーンを筆者は前掲拙稿「ヤンチ
ル侵入直前のルーム」に於て「カイタリー」と讀んだが(三
五、六頁)ハッワーリーのフツクシツリ版テキストを檢証し
た「ヤタール」の *Mujam al-Buldān* (F. Wüstenfeld 校
註本第四卷一二頁 Leipzig, 1865) を讀むとこのヒク
ベ' は「カイタリー」Qaymuri と讀むべきことが明かにな
る。その註に於て。

(70) A. A. p. 385, T. M. pp. 207/196b, 209/197b, K. T. p.
490. ヤタール・チヤーンの辭典後の「ヤタール」の記述は校註者
Dawdaw の發した Hans G. Gottschalk による註本によ
る。Der Bericht des Ibn Naẓif al-Hamawī über die
Schlacht von Jasyūmen, *Wiener Zeitschrift für die
Kunde des Morgenlandes*, 56. Band, 1960, SS. 55—67.
ヤタール・チヤーンの辭典によつたその後の史料の綴り
は Claude Cahen, 'Abdallatif al-Baghdādī et les
Khwarizmiens, *Iran and Islam in memory of the late
Vladimir Minorsky*, Edinburgh, 1971 pp. 149—166.

(71) この報告の表記は YASY CHMN (A. A. pp. 391, 392)
YAŞ JMN (T. M. p. 206/196b) YASJMAN (*Strq*, p. 330)
BASY HMAR (K. T. p. 490) である。その後の表記は

この地名は Yassi Chaman (ヤシロコマン) というトルコ語で「平坦な草地」の意)と推定される。正確な位置は不詳だがイラン・ペルシアの説明によれば水草のある山地であるとす。オスマン朝のスルタン・メフメトⅡ世時代の史書 Tursun Big の *Tarih-i Abu al-Fah* は八六五年(一四六一)マクコンネルのウズン・ハンに對して出征したメフメトがこの地に宿營したことを傳えている。それによれば「エルズヤンシヤンの平原 (uvāsi) を見て YSSY CHMAN という名の yaylağ に宿營し、翌日はエルズヤンシヤン平原に出馬するはずであったが……」(90b-91a)と記されている。

- Hali Inalcik & Rhoads Murphey, *The History of Mehmed the Conqueror by Tursun Beg*, Minneapolis & Chicago, 1978. この記事からヤッス・チメンはエルズヤンシヤン近郊の山地を指すことは明らかで、エルズヤンシヤン西北の現在名 Çimen Dag 山地がそれと當たるのではないかと考えられる。
- (72) *Strā*, p. 330. *T. J.* p. 181, *T. M.* p. 206/196a.
 (73) *Strā*, pp. 331, 337.
 (74) *A. A.* pp. 392-406.
 (75) *T. M.* pp. 206-209/196b-198a, Gottschalk, *Der Bericht*.... SS. 62-65.

- (76) *T. M.* pp. 204-205/196b, Gottschalk, S. 61.
 (77) *T. J.* p. 182.
 (78) *K. T.* pp. 461, 469, 471, 487, 495, 498.
 (79) *A. A.* pp. 379, 430, 485.
 (80) *yāwagi*, *Lughat Nama-yi Dihkhudā* によれば *yāwagi-yān* とは「指揮官の目的もたず、戦争に参加し、各地を巡る軍人集團」を指すものという。ペルシア語散文の史料では例へ *Nizām al-Mulk* の *Siyāsat-nāma* (H. Darke 校訂本 *Tihān*, 1340, p. 96) 及び *Rāwandī* の *Rahat al-Sudūr wa Āyat al-Surūr* (M. Iqbāl 校訂本 *Leyden & London*, 1921, pp. 331, 340, 399) と用例が見られる。
- (81) *T. J.* p. 183.
 (82) シムドゥッラー・ムスタウフィーはこの防壁が實在し、アッバース朝のハリッファ、フーシイク時代の二二八年(八四二/三) *Salām Tarjuman* なる人物がその視察に派遣されたことを記している。N. Q. pp. 243-245. それによれば防壁はイザル王の居所から六三日行程のところにあり、経度は百九度三十分、緯度七三度とあるという。
- (83) *T. M.* p. 132/157b.
 (84) *A. A.* p. 379.

quiring into changes in it, this essay attempts to answer this question.

The author's conclusions are as follows:

The Wang Chonghui 王寵惠 cabinet which Wu Peifu supported collapsed at the end of November 1922.

This was the result of the coup d'état in which Cao Kun, Wang Chengbin 王承斌 and Feng Yuxiang 馮玉祥 formed a united front against Wu Peifu. The collapse led to a change in the strategy. And this change brought about a complete retrogression of the Cao Kun-Wu Peifu faction into a warlord faction of old type.

RŪM SALTĀNAT AND KHWĀRAZMSHĀH

ITANI Kozo

The last Khwārazmshāh Jalāl al-Dīn was the greatest "hero" against the Mongol invasion in West Asia. His energetic military operations extended from Kirmān to Rūm (Asia Minor or Anatolia). Five contemporary historians, being Ibn al-Athīr, al-Nasawī, Juwaynī, Ibn Bībī and al-Ḥamawī recorded his activity in detail. These historical sources lead us to the following conclusion.

Jalāl al-Dīn's vigorous operations against Georgians since his appearance in Ādharbayjān (1225) were highly estimated by Muslim authors. But when he entered into an alliance with al-Mu'azzam, son of al-'Ādil b. Ayyūb, Jalāl al-Dīn was involved in a rivalry between al-Mu'azzam and al-Ashraf, another son of al-'Ādil. After his first siege of Akhlāt, an important city in Armenia ruled by a deputy of al-Ashraf, Khwārazmians were accused of their "evilness of behavior" by Ibn al-Athīr. 'Alā' al-Dīn Kayqubād, Sulṭān of Rūm was related by marriage to al-Ashraf and al-Kāmil, ruler of Egypt, in 1227. After the capture of Akhlāt by Jalāl al-Dīn (1230) and his alliance with the ruler of Arzan al-Rūm, cousin of Kayqubād, Rūm Saltānat and the house of Ayyūb formed an alliance against Jalāl al-Dīn. Finally Jalāl al-Dīn was defeated by the allied forces at Yassī Chaman, near Arzinjān on 28 Ramaḍān 627 A. H. (10. 8. 1230). He could never recover from this defeat and a year later was to be killed

near Āmid in consequence of the pursuit of a Mongol detachment sent by Ögädäi Qā'ān. The reason why Jalāl al-Dīn had to fight against Sulṭān of Rūm and the grandsons of Ayyūb was for his lack of established foundation in West Asia. According to Juwaynī, Jalāl al-Dīn called himself *sadd-i Iskandar* against Mongol infidels, but in fact Khwārazmians lived in *yāwagī* i. e. having neither property nor place. (Ibn Bibī, pp. 379, 430, 485 of facsimile text published by A. S. Erzi) So Khwārazmians had to become plunderers and at last collided with the most powerful forces in West Asia. Furthermore Rūm Salṭanat of Saljūq dynasty had enmity against Khwārazmshāh, because Tekish, grandfather of Jalāl al-Dīn, overthrew Saljūq state in Īrān (1194). Rūm Salṭanat also, assisted by the grandsons of Ayyūb, had to fight against Jalāl al-Dīn in order to protect not only their actual interests in Eastern Anatolia, but their family's fame in history.